

している。しかしながら、聞き取りの際に過去の生息確認についても質問したところ、環境庁の'78年調査以前から生息を確認していないとの回答がほとんどであり、これらの地域で群れが絶滅したと結論を出すのは危険で、むしろ'78年調査の精度に疑問を投げかける結果となった。

群れサイズについては、次のように聞き取りから一応の結果が得られた。10～20頭：14件、20～30頭：16件、30～40頭：1件、40～50頭：4件、100頭：1件、130～140頭：1件（波勝崎餌付け群）、60～80頭：2件（波勝崎餌付け群）。しかし、同じ地域でも回答者により確認頭数がまちまちのため、群れサイズの推定には不十分と判断し、今回、詳細な検討は行わなかった。

## 課 題 2

### 計画：2-1

#### ニホンザルのオスの集団移籍と生活史

古市剛史（明治学院大）

ニホンザルでは、オスが群れ間を移籍することが古くから知られている。しかしながら、野生群において群れを離脱したオスを追跡調査することは困難である。そのため研究対象とする群れにおける移出入の事例からオスの移籍パターンを推定するほかなく、オスが一生のどの時期にどのような移籍を行うのかといった生活史の全体像は明らかにされていない。

これまでの研究では、群れ内で高い順位にいたオスが低順位の個体として他の群れに移籍したり、ある群れに所属するオスが交尾期にだけ他の群れを訪問したりといった興味深いパターンが報告され、オスの繁殖戦略との関連で議論を呼んでいる。こういった議論を進めるためにも、野生群のオスの一生にわたる生活史を具体的に明らかにする必要がある。

この研究では、多数の野生群が連続して分布する屋久島研究林において、これまで個体識別に基づく研究が続けられてきた群れの3才以上のオスすべてに入れ墨を施して追跡し、移籍時の年齢や移籍先、移籍の前後での順位やメスとの関係の変化などを記録することを目指している。また容易な識別手段を提供することで、多くの観察者によ

る情報を有効に活用することも期待できる。

現在までに、主な研究対象となってきた3群のうち2群のすべてのオスと、残る1群のオス3頭（合計13頭）の入れ墨を完了した。また、あるオスの生後3回目までの移籍が確認されたり、一旦1位の地位を追われて移出したオスが、中順位のオスとして再移入してくるなど、いくつかの興味深い事例も観察されている。

この研究はまだ準備段階であり、実際の成果を得るには長期にわたる継続調査が必要であるが、将来的にはニホンザル研究に残る大きな課題のひとつに答えられるものだと考えている。

## 課 題 3

### 計画：3-1

#### チンパンジーの体毛等による父子判定

高崎浩幸

（京都大・アフリカ地域研究センター）

本研究は、前年度の体毛にひき続き、野生状態のチンパンジーから採取が可能な、DNAを含むサンプルとしての繊維質の植物性食物のしがみかすをとりあげ、野生チンパンジーの父子判定を目標として、DNAの抽出、精製およびPCR法によるDNAの増幅を試みたものである。

体毛よりも採取が簡単なサトウキビ等の繊維質の植物性食物のしがみかすに残された口腔内上皮細胞からのDNAの抽出、精製とPCR法による増幅の改良に重点を置いた。しがみかすは、直接観察によって落とした個体の識別が確実に行なえ、餌づけ集団では、サトウキビを直接特定の個体に与えてサンプルを採取できるという利点がある。

50mlの遠心管に濃度50%程度のエタノールと1mM程度のEDTAの中に液浸標本としたサンプルを低温室内で生理食塩水にあげて浮遊させ、ガーゼで粗くしがみかすと細胞浮遊液とを分離する。遠心によって細胞を集め、再度浮遊した状態にもどして、50ミクロンの目のセルストレーナーを通して、50ミクロン以上のゴミをのぞく。微小なゴミの混入が少ない場合にはこの段階で、植物やバクテリアのDNA抽出に多用されるCTABのはいったバッファーでプロテアーゼ処理、フェノールCIAA処理等のDNA抽出作業を行なう。50